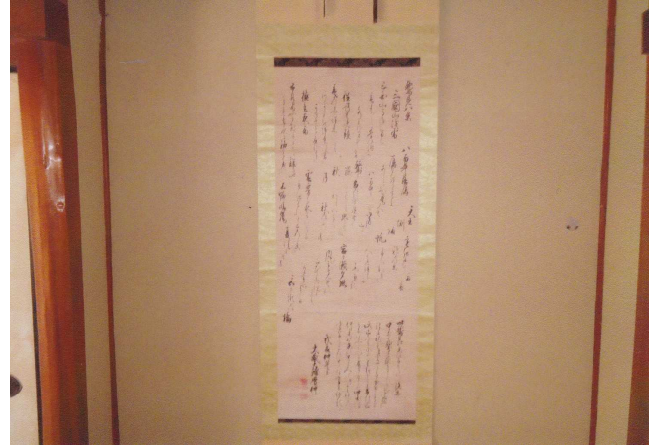


郡上市指定書跡 鷲見八景掛軸

(平成元年8月1日指定)

所有者：中洞 往明寺)

往明寺大幅の『鷲見八景の詠歌』一軸がある。これは、文化年間に富田新田を開墾した鷲見忠左衛門保隆の詠歌八首を大蔵大輔実仲が書き写したものと伝えられ、近江八景になぞらて高鷲村の風景を詠んだものだそうだ。書写の日付は戊辰仲冬日とあり、文化5(1809)年つちのえ、辰年で鷲見保隆が63歳の時である。保隆は単なる豪農家ではなく、相当教養の高い人であったことが分かる。



その八首は次のとおりである。

- 三国山残雪
三国山高峯の雪も春来ては 井の洞川の水まさりけり
- 往明寺の晩鐘
春の日や往き来の道もあきらけき み寺の暮の鐘ぞさやけき
- 植松原の夜雨
五月雨や日数ふるよは誰もこの うえ松原に袖くたすらし
- 八百草落雁
雁鳴きて寒きあしたや色かえん 八百草野べの四方の山々
- 鷲ヶ岳秋月
布引の広野にみちて照るかげは 鷲の高ねの秋の夜の月
- 上野晴嵐
雲きりも夜半の嵐にふきはれて 上野が原の夏の夜の月
- 天王淵帰帆
寒き日も神の恵みのふちなれば 人を渡して帰る舟長
- 宮ヶ瀬の夕照
風寒み冬の山本木の間より 夕日ぞ渡る宮ヶ瀬の橋

この鷲見八景は名にしおふ絶景中にも鷲ヶ岳はならびなき高山にて殊に秋の月は一しほ面白かりき。この山すそは長野とも、また、布引山ともいふて、いと広き野とかや。この主は何其八景の歌よみて予に其の歌の書写こひければ書付待る
戊辰仲冬日

大蔵大輔実仲

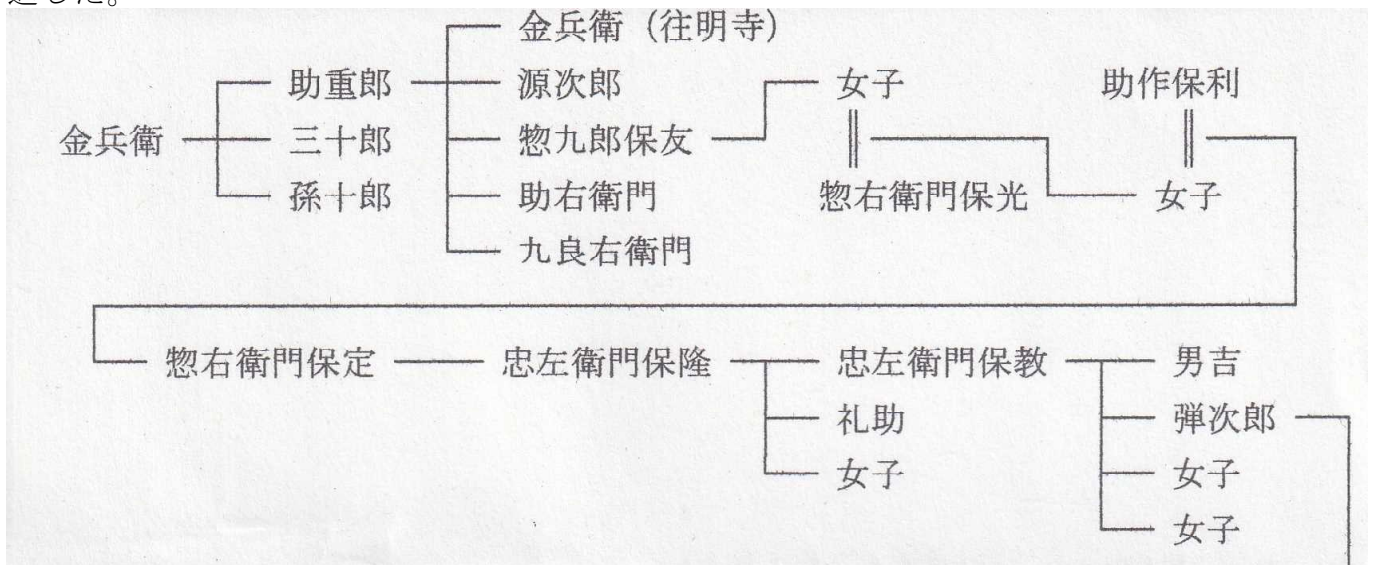
(高鷲村の文化財より)

鷺見忠左衛門保隆と往明寺

金兵衛は越前国大野郡阿久の鉾山が繁盛していた頃、かなやま紺屋を営んでいた人で、鉾山が衰えたので家財を整理して郡上万場村に足を止めた。その後鷺見郷に来て、穴洞村の膝沼次右衛門が落ちぶれていたのものでその名代を継いで中切村に居住することになった。金兵衛には助重郎、三十郎、孫十郎の三子があつて、第二人は居村に分家したが、助重郎は寛永7年(1630)に出家して浄願坊といつた。

中切の鷺見忠左衛門は往明寺から出ているが、向鷺見城主鷺見家とは家系上直接的なつながりはなく、自分の家系を飾るために郷土の名族鷺見氏の姓を冒し、名前も代々保の字を用いたものと思われる。当時鷺見家は衰え、鷺見城はすでに廃城となっていたが土着の鷺見一族と姻戚関係はあつたであろう。

忠左衛門が鷺見姓を称えたのは、4代目惣右衛門以降であつて初代保友、2代保光、3代保利などの名は4代もしくは5代になっておくり名したものである。4代惣右衛門は菩提寺往明寺の復興に力を尽くし、また明和3年(1766)56才の時母の供養のため往明寺に喚鐘(カシヨウ)を寄進し、その鑄造の時多くの小判を鑄込んだと伝えられる人物であつて忠左衛門の名声は近隣に鳴り響いた。中切鷺見家は初代より繁盛したが、2代3代は養子で、その全盛時代は5代保隆の時である。鷺見忠左衛門保隆には次の事が判明している。①苗字帯刀御免②城主鷺見殿の供養③中切白山神社の創立④往明寺の再建⑤忠左衛門新田(正会新田)6代忠左衛門保教の晩年になると、名古屋に別荘を持ち家勢は傾きはじめる。7代目弾次郎の時、名古屋の別荘で遊興し、相場に手を出すなど家運大いに傾く。8代目忠左衛門の時、家運傾き復興ならず、姓を佐藤と改める。佐藤忠左衛門の子慶之助は明方畑佐村から妻を迎えたが自分も畑佐に移住して鉾山に 関する仕事に従事、中切鷺見家も転退した。



(高鷺村史より)

(以下省略)

郡上市指定史跡 正会成田碑及び飛騨街道跡

昭和52年12月20日 中洞 奥富田
鷺見忠左衛門保隆は、文化9年多くの人夫と費用を費やして中洞付近を開墾し難工事を完了し、富田新田と称した

昭和59年国道改良工事によって旧飛騨街道、ししがき、かごどめの跡、旧成田碑はほとんど消滅し、成田碑だけが現在の場所に移動した。

